

## 「過越の祭り」

マルコの福音書 14:22～31

### はじめに

イスラエルの三大例祭の一つで、出エジプト記 12 章～13 章に定められた、毎年三月～四月頃に行われる「過越の祭り」、これを皮切りに七日間、ユダヤ人たちはマツツアと呼ばれる、イースト菌（酵母）を入れないパンを食べて過ごすことから「種なしパンの祭り、除酵祭」とも呼ばれるその時期に、イエシュアは弟子たちとともにこの祭りを行うため、エルサレムに來られました。前回はイエシュアの 12 弟子の一人であるイスカリオテのユダの裏切りについての記述でしたが、それに続く今日の箇所では、ペテロおよび他のすべての弟子たちがイエシュアにつまずき、そして裏切ることが示されています。そのような、一見悲劇、残念とも思えるような状況の中ですが、ここにも神のご計画の完成である「神の国」の福音が表されています。今日もそれをヘブル的視点、イスラエルの視点で捉えてまいりましょう。

### 1. 種なしパン

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:22 さて、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしのからだです。」

「最後の晩餐」とも呼ばれる、イエシュアと弟子たちの過越の祭りの食事の様子が、ここから描かれていきます。これは単なる祭りや宴の食事のようなものではなく、今日でも行われているユダヤ人たちの最も大切な儀式の一つです。ここでその儀式をもう少し細かくお伝えしたいと思います。まず儀式用に三枚のマツツアと呼ばれる種なしパンを用意します。そしてこれをみな右の写真のような専用の袋に入れ、そのうちの一枚だけを取り出します。そしてその一枚を二つに裂いて（割って）、一方を布でくるみ、隠してしまいます。そして残ったもう一方をみなで少しずつちぎって分け合って食べるのです。ユダヤ人たちは古くからこのように過越の祭りの儀式を行っていました。この儀式の意味を説明しますと、三枚のマツツアとは父、御子、御霊なる神を表しています。そして取り出された一枚は神の御子メシアであり、これを裂き、そして布でくるんで隠すことは、その死を意味しています。イエシュアはこの取り出された、御子を表す一枚のマツツアを手にとって「これはわたしのからだです」と言われたのです。そしてこれを裂いて、慣例に従い、またご自分の死を、墓に葬られることを表してその一方を布でくるみ、隠されました。そしてもう一方のマツツアは弟子たちに与えられました。ここにはこの後イエシュアと弟子たちが引き離されること、弟子たちがイエシュアにつまずいて離れ去って行くことが表されているのです。



またこの儀式は、ユダヤ人が古くから今日もなお行っているものであると述べました。イエシュアと彼らの関係が、今日もなお断たれたまま、引き裂かれた状態のままであることが、皮肉にも彼らの儀式の中にはこのように表されているのです。ところで私たち教会は、聖餐式においてパンを裂き「これは十字架で裂かれた主の御体です」と唱えてますが、実際に引き裂かれたのは、神の御子イエシュア・メシアと神

の選びの民イスラエルとのつながり、交わりがそうだったのだということを表しているのです。しかし今日もおイェシュアをメシアとして受け入れないユダヤ人たちは、この意味を、この事実を知らずに毎年過越の祭りをやっているのです。

## 2. ぶどう酒の杯

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:23 また、杯を取り、感謝の祈りをささげた後、彼らにお与えになった。彼らはみなその杯から飲んだ。

14:24 イエスは彼らに言われた。「これは、多くの人のために流される、わたしの契約の血です。」

過ぎ越しの食事における儀式は、マツアだけでなく、このぶどう酒の杯についても定められているものがあります。ユダヤ人たちはこの時、必ず四杯のぶどう酒を飲み干します。この四杯のぶどう酒には、神がイスラエルに語られた以下の預言、約束、四つの契約が表されているのです。



出エジプト記【新改訳 2017】

6:6 それゆえ、イスラエルの子らに言え。『わたしは【主】である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役から導き出す。あなたがたを重い労働から救い出し、伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う。』

6:7 わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。

これは神がモーセに語られた、イスラエルに対する預言ですが、ここには神の四つの約束、預言「契約」が示されています。すなわちこういうことです。

一杯目：「わたしはあなたがたをエジプトの苦役から導き出す」

二杯目：「あなたがたを重い労働から救い出（す）」

三杯目：「伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う」

四杯目：「わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる」

イエシュアがこの儀式をなされた時点では、二杯目までの預言が成就、実現していました。すなわちユダヤ人たちはエジプトの奴隷から解放され、バビロン捕囚からも帰還し、エルサレムに神殿を再建し、イスラエルの地に住んでいました。ですからイエシュアは次の三杯目の杯を取り「これは…わたしの契約の血です」と言われたのです。すなわち「伸ばされた腕と大いなるさばきによって贖う」杯です。確かにイエシュアは天から「伸ばされた」、遣わされた、来られた御方であり、その血によってイスラエルを「贖う」御方だからです。この次の日に、十字架にかかれ、まさにその血を流して、イエシュアは「多くの人のために」すなわちイスラエルとそれにつながるすべての人、すなわちイエシュアをメシアとして信じるすべての人のための贖いを行われるのです。

しかしここでイエシュアが次の四杯目の杯を取ることはありませんでした。なぜならこの四杯目の杯が指し示す預言は、神のご計画の完成である「神の国」の成就を表すものだからです。ですからイエシュアはここで次のように語っておられるのです。

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:25 まことに、あなたがたに言います。神の国で新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、もはや決してありません。」

先ほどのマツアについての過ぎ越しの儀式にはイエシュアの死と、弟子たちのつまずきが、そしてイエシュア・メシアとユダヤ人、イスラエルとの決別、断絶が表されていましたが、この四杯のぶどう酒の杯にはその回復、最終的な神のご計画の完成「**神の国**」が表されているのです。ですからイエシュアはここでぶどう酒の杯については述べておられますが、先の裂かれたマツアについては一切触れておられません。「**神の国**」で過ぎ越しのマツアが裂かれることは、すなわちイエシュアとイスラエルの関係が切れることは、もはや二度とないということなのです。

### 3. 賛美とオリーブ

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:26 そして、賛美の歌を歌ってから、皆でオリーブ山へ出かけた。

14:27 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたはみな、つまずきます。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散らされる』と書いてあるからです。」

次に場面は変わって、イエシュアと弟子たちは「**賛美の歌を歌って…オリーブ山へ出かけた**」とあります。この描写はただの状況説明ではありません。神のご計画の一つの重要な出来事を指し示す「型」たとえばです。ヘブル語で「**賛美**する」ことをハーラル(הלל)と言いますが、この言葉は本来そのような意味では用いられていませんでした。

創世記【新改訳 2017】

12:15 ファラオの高官たちが彼女を見て、ファラオに彼女を**薦めた**ので、サライはファラオの**宮廷に召し入れられた**。

これはアブラムの妻サライがエジプトでファラオすなわち王の「**宮廷に召し入れられた**」という出来事です。ここでそのように「**薦めた**」と訳されているのが聖書で最初のハーラルです。ことの良しあしは別としてこのハーラルは本来、**王の家に迎えられる、王の花嫁となる**という出来事を指し示す言葉だということです。

また「**オリーブ山へ出かけた**」ともありますが、「オリーブ」はヘブル語でザイト(זית)といい、その最初の言及は以下の箇所です。

創世記【新改訳 2017】

8:10 それからさらに七日待って、再び鳩を箱舟から放った。

8:11 鳩は夕方になって、彼のもとに帰って来た。すると見よ、取ったばかりの**オリーブ**の若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が**地の**上から引いたのを知った。

これはノアの箱舟の出来事の一場面です。箱舟から放たれた鳩は、空を飛び「地上から」ザイトすなわち「オリーブの若葉」を取り、そしてただちに「帰って来」ました。「賛美」そして「オリーブ」これらの持つ本来の意味を組み合わせると、王の花嫁として、地上から取り去られ、ただちに空へ、そして王の家へと迎えらる私たち教会の姿が浮かび上がってくるのです。つまりここには教会の携挙、イエシュアの空中再臨の事実が表されているのです。ちなみに十字架の死から復活されたイエシュアはこの「オリーブ山」から天に上って行かれます(使徒 1:12)。この事実もまた教会の携挙を指し示す出来事と言えます。

そしてこの教会の携挙とほぼ同じ時に起こるのが、獣と呼ばれる反キリストによるユダヤ人への大迫害です。その事実が次の「わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散らされる」という御言葉には表されているのです。この表現は先の種なしパンについての箇所、イエシュアから弟子たちに渡されたマツアが一人ひとりにちぎり分けられたこととも結びついています。そしてこの預言は何よりゼカリヤ書 13:7 からの引用です。

ゼカリヤ書【新改訳 2017】

13:7 剣よ、目覚めよ。わたしの羊飼いに向かい、わたしの仲間に向かえ——万軍の【主】のことば——。

羊飼いを打て。すると、羊の群れは散らされて行き、わたしは、この手を小さい者たちに向ける。

13:8 全地はこうなる——【主】のことば——。その三分の二は断たれ、死に絶え、三分の一がそこに残る。

13:9 わたしはその三分の一を火の中に入れ、銀を錬るように彼らを錬り、金を試すように彼らを試す。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民』と言い、彼らは『【主】は私の神』と言う。』

終わりの日、反キリストによるユダヤ人への大迫害、大虐殺によって「三分の二」のユダヤ人が殺されます。しかし「三分の一」は生き残り、イエシュアは地上に再臨され「これはわたしの民」と言い、彼らは『【主】は私の神』と言うという、イスラエルの悔い改め、回心が起こるのです。このように、教会の携挙、ユダヤ人の大患難と回心、そしてイエシュアの地上再臨によるイスラエルの回復という神のご計画が、先の過ぎ越しの食事の儀式に指し示されたものを補って説明するかのよう、ここには表されているのです。さらに加えてイエシュアは次のようにも語られました。

#### 4. ガリラヤ

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:28 しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。』

イエシュアはユダヤ人たちがやがて終わりの日に大きな患難を通ること、「羊は散らされる」ことを預言されました。しかし後には再び集められます。「よみがえった後」にそれをなさいます。つまり死を打ち破り、もはや朽ちることのない永遠の身体をもって、そしてその後続く者、倣う者、すなわち同じ復活の身体、永遠の身体を持つ者として集められます。

またここで挙げられている「ガリラヤ」という名は「回す、転がす、移す」という意味のガーラル(גליל)を語源とする地名です。そしてその本来の意味はこうです。

創世記【新改訳 2017】

29:2 ふと彼が見ると、野に井戸があった。ちょうどその傍らに、三つの羊の群れが伏していた。その井戸から群れに水を飲ませることになっていたからである。その井戸の口の上にある石は大きかった。

29:3 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から転がして、羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻すことになっていた。

これはヤコブすなわちイスラエルがその旅の途中に見た一つの井戸についてのものです。その井戸の口をふさいでいる石を「転がして」と訳されているのが聖書で最初のガールルです。そしてそれは羊の「群れがみなそこに集められ」ることと、そして「羊に水を飲ませ、その石を再び井戸の口の元の場所に戻す」ことを指し示しており、この描写は神のご計画の完成を見事に表したものとなっているのです。すなわちイエシュアはイスラエルというご自分の羊をみな集め、彼らに永遠のいのちという水を飲ませ、イスラエルを元に戻す、神の民として神の王国としてこれを回復されるということが表されているのです。

このように、一見イエシュアは弟子たちに対してこの後すぐに起こることを伝えながらも、そこには世の終わりに起こる最終的な神のご計画の完成を「型」として言い表してもおられるのです。

## 5. 鶏が鳴く

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:29 すると、ペテロがイエスに言った。「たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」

14:30 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

14:31 ペテロは力を込めて言い張った。「たとえ、ご一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」皆も同じように言った。

ここでイエシュアはペテロに対し、不思議な預言をしておられます。「今夜、鶏が二度鳴く前に」とイエシュアは言われました。この表現は 13 章の「世の終わりに近づくときのしるし」についてイエシュアが語られたたとえの中でも用いられていました。

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:34 それはちょうど、旅に出る人のようです。家を離れるとき、しもべたちそれぞれに、仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているように命じます。

13:35 ですから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰ってくるのか、夕方なのか、夜中なのか、鶏の鳴くころなのか、明け方なのか、分からないからです。

13:36 主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見ることがないようにいなさい。

このように、「鶏が…鳴く」時とはイスラエルの「家の主人」であるイエシュアが帰って来られることを指し示す言葉なのです。そしてそれは「二度鳴く」とあります。ここに使われているカーラー(אָקל)は本

来「名づける、呼ぶ、選び分ける」という意味の言葉です（創世記 1:3～5）。またさらにこの鶏を用いて、イエシュアはにこのようにも語っておられます。

マタイの福音書【新改訳 2017】

23:37 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

23:38 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。

このように「鶏が二度鳴く」とは、イエシュアがご自分の選びの民を、二度呼び集められるということを表しています。それはもちろんイエシュアの空中再臨による教会の携挙と、地上再臨によるイスラエルの回復のことを指し示しています。ですから「鶏が二度鳴く前に」とは、この二つのことが起こるまで、という意味であり、それまで「エルサレム、エルサレム…見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる」ということなのです。これはもちろんエルサレムの神殿を指しており、それが荒らされ、破壊され、しかもそれが「三度」起こることが指し示されているのです。それはすなわち、ソロモンが建てた第一神殿、ゼルバベルが建てた第二神殿、そしてこれから後に建てられる第三神殿においてです。その事実を指し示しているのがこの「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」というイエシュアの御言葉なのです。イエシュアの「二度」行われる再臨、そして「三度」破壊されるエルサレム神殿、これらの出来事を経て、次のような人々、国民が、地上に現れるのです。

「私は（イエシュアに）つまずきません」

「（イエシュア）を知らないなどとは決して申しません」

弟子たちのこれらの告白は、この後の彼らの行動を見れば、一見大嘘をついているように見えます。しかしやがて「神の国」において彼らは、イエシュアを信じるイスラエル、それにつながる私たち教会は、この告白どおりの民、まさに神の民となるのです。その事実がここでの彼らの告白には表されているのです。

## 6. 力を込めて言い張る

新型コロナウイルスの感染拡大が一向に収まらない中、実に多くの人が、いやほとんどすべての人が「また以前のような、もとの暮らし」を求め、そして祈っています。では私たちも彼らと同じように、過ぎ去った過去を懐かしんで、それを求めるべきなのでしょうか。ある意味でそれは正解なのかもしれません。しかし懐かしむ過去があまりにも近すぎます。視野が狭すぎます。私たちが見つめるべき過去とは、最も過去である創世記に記されたエデンです。そしてそのエデンが指し示すものは、最も未来、永遠の「御国、神の国」です。そしてそれを実現、完成させる唯一の御方、神の御子イエシュア・メシアであり、私たちが祈り求め、慕い求め、せつに待ち望まなければならないものは、実にこの御方の来られる事、再臨です。たとえこの今のパンデミックが終わっても、戦争、貧困、病に飢え、問題は次々とやって来ます。根本的な問題解決に必要なのはお金でも医療でも人の団結力でもなく、ただイエシュアなのです。私たち教会はその事実、その真実を知っている、この地上で唯一の民です。ですから救いはただ主イエシュアにあることを「力を込めて言い張っ」て歩いてまいりましょう。今日も「御国が来ますように」、「主イエシュアよ、来てください」と祈ってまいりましょう。聖霊の助けがありますように。